

かくれんぼ

麻本  
いをり



三度目の夏だった。

三年前、この病院で僕の母は亡くなった。

脳溢血で倒れてから、物忘れのひどくなった母が入院していたんだ。

春がくる前、「桜の花が見たいね・・・」と言っていたが、容態は急変し、あっという間に、旅立って行った。

お世話になったここへ、後始末やら何やらで、春が過ぎても通っていた。

そんなある日、中庭の大きな木の下で、いつも同じベンチにじっと座っている女の人を見つけた。

そんなに若くはなさそうだけれど、まるで少女のようにあどけない感じだった。

婦長さんの話しによると、その人は事情があってこの病院に来てから、何も言わず、誰も見ず、ただ自分の世界にこもってああして一日中木陰のベンチで空を見上げているそうだ。

その人の名は、「なおさん」と言う。

ご主人がいるらしいが、ここへ預けてから一度も面会には来ていないらしい。



はじめての夏、僕はなおさんの隣にそっと座ってみた。

「こんにちは」

話しかけても、答えはない。

ただ、なおさんは、微笑みながら空を見ているだけだった。

不思議だった。

なおさんの隣に座ると、ココロがほっとするんだ。

どう言っているのかわからないけれど、なおさんのそばにいと、気持ちが安らいでくる。

それから、用もないのに時々病院へ行くようになった。

もちろん、中庭のあの木陰に座っているなおさんに逢いに行くために。

先生とは、長い付き合いで気心が知れているから聞いてみた事がある。

「先生、なおさんはどうしてあんなっちゃったのかな？」

「亮くん、患者さんの事を他の人には言えないんだけど、これだけは言えるよ。なおさんはね、みんなが見ているところを見ていないんだ。なんていったらいいかな……。そう、見えない世界が見えているみたいなんだ。医者わたしがこんなことを言っているものかどうか分からないけどね」

と、先生は笑って言った。

「それで、その世界ってどんな？」

「あのね、人がココロを閉ざすには大きく分けて二通りあるんだ。ひとつは、突発的に起こったこと。強い恐怖とか、悲しみとか。もうひとつは、長い時間かけて起こるもの。ゴムをね、こう伸ばしてゆくだろ？」

先生は、ポケットから輪ゴムを出して両手で伸ばしてゆく。

「そうすると、あるときプツッとキレる。この輪ゴムみたいに。なおさんは、前は明るくてよく気がつくやさしい女の人だったみたいなんだ。でも、それはきっと無理をしていたんだね。必死で自分のココロの均衡を保っていたのに、あるとき、ゴムがキレるみたいにココロがキレてしまった。そして、自分にとって怖いこの世界から自分を守るために閉ざしたんだよ。ココロを。」

「でね、今は僕たちには見えない世界に住んでる。なおさんね、朝起きたらきれいにお化粧もするし、ごはんだってちゃんと食べるんだ。それも、食べる前に、こう……。両手を合わせてね。ちょっと眼をとじて。それから、大切そうに食べるんだ。それを見てるとね、僕たちが住んでいると想ってるこの世界より、なおさんが見ている世界の方が、よほど美しいんじゃないか？って、想ってしまうよ」

僕は、ここへ来るたびに、答えのないなおさんに向かっていろいろ話しかけた。

はじめての夏。

「なおさんのそばにいと、気持ちいいよ」  
と言ったら、なおさんは空を見上げたまま、「あっ」と言ったから、僕は驚いてなおさんの顔を見た。

なおさんは、微笑んだまま「虹」と言ったんだ。  
はじめて聞いたなおさんの声だった。

空には、夏の虹がかかっていた。

二度目の夏。

僕は木陰にいて、木もれ日を浴びているなおさんに水まんじゅうのお土産を持って行った。  
なおさんの横顔は、太陽のひかりと木の葉の影できらきらかがやいてきれいだった。

「ほら、なおさん、冷たくておいしいよ」  
なおさんの手のひらに水まんじゅうをそっとのせた。  
なおさんは、両手で受けとって、しばらくながめてそして膝の上の上にのせて、両手を合わせた。  
ちょっとの間、目を閉じて。  
まるで祈っているみたいに大切においしそうに食べてくれた。

秋が来て、冬が来て、それでもなおさんは毎日中庭のベンチに座り続けていた。

桜の花が咲く頃、先生は、こっそり僕を呼んだ。

「亮くん。なおさんね、この間亮くんが帰ってから病室ですごく暴れ出したんだよ。それは、もうみんな手をつけられないくらいに、手当り次第にモノを投げつけたりして・・・」  
ビックリした。あの、おだやかななおさんが怒るなんて、考えられなかった。

「なおさんは、回復してきていると想う。「怒り」って深く眠ってしまいがちなんだよ。感情を出せなくても、悲しみとか、楽しさは出せる事が多い。でも、「怒り」って出にくいんだね。それが出て来たってことは、なおさんにとっては一歩も二歩も進展なんだよ。多分、そう遠くない時期に、ほんとうのなおさんに戻る気がしてる」

三度目の夏。

セミが鳴いている暑い日だった。

「なおさん、こんにちは。今日も暑いね。でも、ここは気持ちいいや」

そう言ってなおさんの隣に座る。

「ねえ、なおさん。ぼく、なおさんがいてくれてうれしいよ」

なおさんは、遠く空を見たまま、首をかしげて、「かくれんぼ」と、言った。

はじめての夏に聞いたっきりのなおさんの声。

僕は急いで、でも、ゆっくりと答える。

「かくれんぼ？わかった・・・じゃあ・・・」

「もーいーかい？」

僕は、そう、なおさんに言った。

セミがジンジン鳴いている。

「もーいーよー」

小さな声でなおさんは答えた。  
僕の方を見て、笑って。

それから、はらはらはらはら涙をいっぱい流した。  
なおさんは、笑いながら泣いていた。  
僕も、笑いながら泣いた。



「なおさん、おかえり」

空は、濃く、青かった。

三度目の夏。  
僕は、もう、ひとりじゃない。

